

〈研究ノート〉

スタインバーガー

—1870年代におけるアメリカの太平洋進出を視座に—

Steinberger:

The Perspective of America's Expansion into the Pacific in the 1870s

矢野 涼子

Ryoko YANO

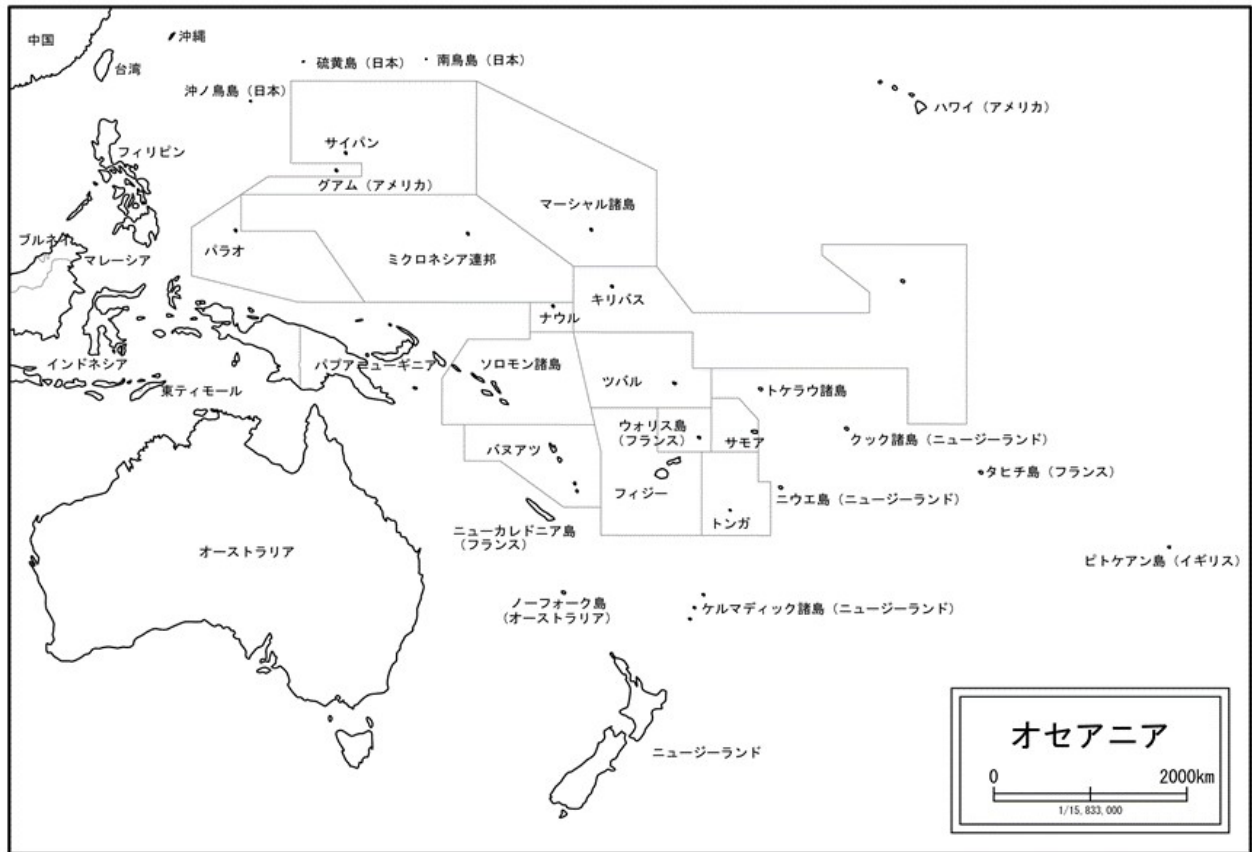
I はじめに

サモア諸島は、ハワイとニュージーランドの間、ニュージーランドから約2,900km 地点に位置する。1830年代、イギリスやアメリカのプロテスタント系ミッションが来島する。ここからサモア人は本格的に欧米人と交流をもつこととなった。1844年に、イギリスのミッションであるロンドン伝道協会(London Missionary Society)の神学校が設立される。翌1845年には、カトリックのミッションもサモアで布教活動を行うようになった。1860年代には、プランテーションの経営とコプラの貿易を目的として、ドイツの企業もサモアに進出してきた。1899年、サモア諸島は、植民地化の過程で西経171度を境に東西分割される。西半分はドイツ領、東半分はアメリカの支配下にある非併合領土¹となったのである。この頃までには混血も進んでおり、サモアには、欧米人、太平洋諸島民、華僑、混血の人々など様々な人々がいたといわれている²。第一次世界大戦でのドイツの敗戦により、1919年、旧ドイツ領サモアは、ニュージーランド国際連盟委任統治領(以下、委任統治領)となり、1962年に西サモアとして独立をした³(地図1参照)。

1 アメリカ合衆国政府の管理下にはあるが、いずれの州にも属さない地域。アメリカ領サモアとして今日に至っている。面積は199 km²で、2017年の人口は、51,504人である。CIA World Factbook: <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/> (2017年10月1日)

2 中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層——混合婚をめぐる議論を起点として」田嶋信雄／工藤章[編]『ドイツと東アジア1890-1945』東京大学出版会、2017年、257-259頁、山本真鳥「ジェンダーの境界域——ポリネシア社会の男の女性」山本真鳥[編]『性と文化』法政大学出版局、2004年、189頁。

3 1962年西サモアとして独立後、1998年に国名を西サモアからサモア独立国に改称。面積は2,831 km²で、2017年の人口は200,108人である。CIA World Factbook.



〈地図1：オセアニア〉

1899年にサモア諸島の東半分がアメリカ領となったことは、すべて述べたとおりであるが、それ以前から、サモアとアメリカとの関係の構築を考える上で、看過することのできない人物がいる。それは、スタインバーガー (Steinberger) である。詳細は後述するが、彼は、1870年代に二期にわたって、サモア諸島で活動した。しかしながら、彼の活動目的や活動における立場は、現存する史料が十分でないため、把握することが難しい。けれども、彼の活動について、体系立てて把握することは、今後、アメリカによる太平洋進出を理解する上で重要なことだといえよう。

そこで、本稿では、先行研究に依拠しながら、アメリカの太平洋進出を視野に入れつつ、スタインバーガーの生涯を整理していく。構成は以下の通りである。次章では、サモアで活動する以前のアメリカにおけるスタインバーガーの地位と活動を把握する。次に、第3章では、アメリカがサモアへ進出していく過程と、そこにスタインバーガーがかかわっていった経緯を示していく。第4章で、スタインバーガーのサモアにおける活動を確認した後、第5章では、彼がサモアから追放された背景と当時のサモアを取り巻く状況を見ていく。最後に、今後の研究課題を示すことで結論に代えることとする。

II ドイツ系アメリカ人、スタインバーガー

はじめに、アメリカにおけるスタインバーガーの地位と活動について見ていこう。

スタインバーガーは、1840年12月25日⁴、ペンシルベニア州で9人兄弟の6番目の子どもとして

4 Torodash, M. (1977), "Steinberger of Samoa: Some Biographical Notes," *The Pacific Northwest Quarterly*, vol.68, No.2, pp.49-59 には、1835年とされているが、*New York Times*, May 4, 1894 で、ス

生まれた。父親は勤務医で、内科が専門であった⁵。また、父親は石炭と鉄の管理業を営んでおり、アメリカで最初の無煙炭で鉄を熔解する溶鉱炉の管理者であったが、1837年のアメリカの大不況によって破産をしている。父方の祖父母はドイツ生まれであった⁶。スタインバーガーは、15歳までこのペンシルベニアの地で育った。1856年、彼の両親はアイオワ州カウンスルブラウスに転勤となり、その際ネブラスカ州ベルビューに一家は移り住んだ⁷。

19歳になる少し前、スタインバーガーはコロラド州のチェリークリークに向かった。そこでは、この頃、金が発見されたばかりであった。コロラドに到着してすぐの1858年11月、スタインバーガーは、ある仕事をする人員の2人のうちの1人として選ばれる。それは、テリトリー（準州）議会（the Territorial Legislature）からセントチャールズの町有予定地の設置許可を得る仕事であった。それからの2年間、彼は、この地で政治家として、またコロラド州最初の劇作家として活動した⁸。

1860年代の最初、スタインバーガーはアメリカ東海岸に行き、60年代の大半をニューヨークで過ごした。この時、スタインバーガーの仕事は順調だったようである。1867年、彼はニューヨーク州ロチェスターのキャロライン・リディア・エリーと結婚した。しかし、彼女は第一子出産後、長い闘病生活の末、1871年に他界する。スタインバーガーの子どもはこの一人だけであった⁹。

この他に、時期は定かではないが、スタインバーガーはプリンストン大学で法律の教育を受けていたと言われている。しかしながら、プリンストン大学の出席簿に彼の名前は登録されておらず、彼の名前を知る卒業生もいないため¹⁰、真偽の程は不明である。

III アメリカのサモアへの進出とスタインバーガー

ここでは、アメリカがサモアへ進出していく過程と、そこにスタインバーガーがかかわっていった経緯を示したい。

サモアとアメリカの外交上の関係を歴史的に見ていくと、1839年にまで遡ることができる。1839年までに、サモアには外国の捕鯨船と商船が訪れるようになった¹¹。ツツイラ島のパゴパゴは穏やかな港であり、地理的にもサンフランシスコーオークランド間、パナマーシドニー間、バルバライソー中国もしくは日本間など¹²、様々な航路の中間点にあったためである。1839年末、アピア・コードとよ

スタインバーガーが54歳で死亡したとあるため、1840年と判断した。なお、Stathis, S. W. (1982) "Albert B. Steinberger: President Grant's Man in Samoa," *Hawaiian Journal of History*, volume16, pp.86-111では、1840年生まれとなっている。

5 Stathis, "Albert B. Steinberger," p.87.

6 Torodash, "Steinberger of Samoa," *The Pacific Northwest Quarterly*, vol.68, 1977, p.51.

7 Stathis, "Albert B. Steinberger," p.87.

8 Stathis, "Albert B. Steinberger," p.88.

9 Stathis, "Albert B. Steinberger," p.88.

10 Torodash, "Steinberger of Samoa," p.51.

11 Meleisea, M. (1987) *The Making of Modern Samoa: Traditional Authority and Colonial Administration in the History of Western Samoa*, Suva: Institute of Pacific Studies of the University of South Pacific, p.37.

12 この時代の欧米の史料が航路を取り上げる際、日本と中国は国名で記載されることが多い。こ

ばれる港に関する規定が制定された。ただし、デーヴィッドソン (Davidson, 1967) とソッオ (So' o, 2008) によると「アピア・コードは十分に機能しなかった」ようである¹³。サモアには当時、ローカル・フォノというサモアのネイティヴによる地方運営会議があった。デーヴィッドソンは、「ローカル・フォノの影響が及ぶ範囲かつサモア人に利益が生じる範囲でのみ、アピア・コードが適用された」と述べている¹⁴。

アンダーソン (Anderson, 1978) は、1839年には、「アメリカとサモアの首長との間で条約が結ばれていた」、と記している。また、同年にはアメリカ領事ジョン・ウィリアムズ (John C. Williams)¹⁵ が、サモアに着任している。1839年にはサモアとアメリカとの関係が築かれ始めていたものの1860年代までアメリカ人のほとんどはサモアの存在すら知らなかった、との見解をアンダーソンは示している¹⁷。

1870年代になると、サモアの商業的価値を見出し、サモアに進出して来るアメリカ人があらわれた。ウィリアム・H・ウェブ (William H. Webb) は、その筆頭であった。彼は、ニューヨークで影響力をもつ船事業者であった。サンフランシスコとサモアを結ぶ蒸気船航路の設立が、大きな利益をもたらすと彼は考えた。そこでアメリカ政府からこの蒸気船航路を設立するための補助金を得ようとしたのである¹⁸。

1871年、ジェームス・B・M・スチュワート (James B. M. Stewart) もサモアに商業的価値を見出し、サモアにおいて土地の購入を開始していた。同時に、ウェブとスチュワートは、サモアにアメリカの支配下にある「太平洋貨物集積所 (Pacific entrepôt)」の設立を計画し始める。1871年8月、ウェブは、貿易商エドガー・ウォークマン (Edger Wakeman) をサモアに派遣した。ウォークマンがサモアを既に何度か訪れ、サモアの事情に通じていたためである。彼の任務は、サモアにおける港と商業の展望を調査することであった。一ヵ月後、ウォークマンは次のような調査結果を出した。それは、サモアのツツイラ島、パゴパゴ港が太平洋における商業拠点として最もふさわしく、莫大な商業的利益をあげることができるであろうというものであった¹⁹。

スチュワートは、この結果を受けて1871年12月5日、プランテーション事業のための企業を設立

これは、当時の日本は鎖国中であり、中国は海禁政策を取っていたため、欧米とどこか特定の日本や中国の航路があったわけではなく、将来的なアジア進出を目指した欧米諸国が日本と中国のどこかの港との航路を確立することを考えていたため、このような記載になっていると考えられる。

13 Davidson, J. W. (1967), *Samoa mo Samoa: The Emergence of the Independent State of Western Samoa*, Melbourne: Oxford University Press, pp.39-40, So' o, A., *Democracy & Custom in Samoa: an Uneasy Alliance*, Suva: IPS Publications, The University of South Pacific, 2008, pp.28-29.

14 Davidson, *Samoa mo Samoa*, p.40.

15 Anderson, S. (1978) "Pacific Destiny' and American Policy in Samoa, 1872-1899," *Hawaiian Journal of History*, volume12, p.46.

16 後にイギリス領事にもなる。ロンドン伝道協会とも親密な関係を持っていた。

17 Rigby, B. (1988), "The Origins of American Expansion in Hawaii and Samoa, 1865-1900," *International History Review*, 10(2), pp.85-86.

18 Rigby, B.(1973), "Private Interests and the Origins of American Involvement in Samoa, 1872-1877," *The Journal of Pacific History*, vol8 (1), p.75.

19 Rigby, "Private Interests and the Origins of American Involvement in Samoa, 1872-1877," pp.75-76.

した。これが、中央ポリネシア土地商業会社 (Central Polynesian Land and Commercial Company) である。当時、スチュワートが発行した企業の案内書によると、彼は、サモアにおいて最良の土地、180,000 エーカーを所有していたとなっている。これと同時に、ウェブはパゴパゴの港に「中央ポリネシア交易拠点」を設置した。設置後、スチュワートは、当時のアメリカ国務長官ハミルトン・フィッシュ (Hamilton Fish) に、この事業の支援を要請した。²⁰

支援をより確実なものにするために、パゴパゴの港にアメリカ海軍の軍艦を配置することが進められた。これは、ハワイのホノルルでの事例にならったものであった。1872年1月、ウォークマンは、海軍将校ジョン・A・ウィンズロウ (John A. Winslow) に蒸気船航路の設置を求めた。²¹ 1872年までに、アメリカ海軍も時のグラント政権も南太平洋におけるパゴパゴの重要性を認識するようになっていた。1872年2月、アメリカ海軍中佐リチャード・W・ミード (Richard W. Meade) が行動を起こす。サモアのツツイラ島の首長と条約を結んだのである。条約の内容は次のようなものであった。サモアはアメリカに対しパゴパゴの独占使用権を与える、その見返りに、サモアがアメリカの保護を必要とする際にはアメリカがこれを保護する、というものである。しかし、このミードによる条約締結の動きは、上司や政権からの支持を得たものではなく、ミードの個人的判断によるものであった。この時、この条約の有用性を理解した、グラント大統領 (President Grant) は、議会にこの条約の承認を強く求めた。この条約の承認には、保護条項の修正が必要であった。しかし、議会は、この問題を取り上げることさえ拒んだのである。²²

この頃、スタインバーガーは財政的な問題を抱えており、自らの財産を取り戻そうと躍起になっていた。こうした中、スタインバーガーは政府の要人と結びつきを持つようになっていった。ウェブは、スタインバーガーとニューヨークのビジネスサークルで知り合いになった。そして、スタインバーガーをサモアに派遣する人材としてグラントに推薦したのである。スタインバーガーは、この頃、グラントだけでなく、グラントの私的秘書であるオーヴィル・E・バブコック (Orville E. Babcock) とも連絡を密にとるようになっていた。また、1872年の終わりには、フィッシュとも関係を築き上げていた。²³

1873年、グラントはスタインバーガーをサモアに派遣した。これには、二つの目的があった。一つは、アメリカ人の関心をサモアに向けるためである。もう一つは、サモア人にアメリカが幸福と財産等の恩恵を与える国であるということ的印象づけるためであった。²⁴ 1873年6月29日、スタインバーガーはサンフランシスコから出航した。サモアに向かう途中、彼はハワイに立ち寄り、カラカウア王と会談している。この時、スタインバーガーはカラカウアに、自らが政府特使であること、自分がサモアで活動するのは政府の意志であり、自らの企画によるものではないことの二点を伝えている。8月の始め、スタインバーガーはサモアに到着したのであった。²⁵

20 Rigby, "Private Interests and the Origins of American Involvement in Samoa, 1872-1877," p.76.

21 Rigby, "Private Interests and the Origins of American Involvement in Samoa, 1872-1877," p.76.

22 Anderson, "'Pacific Destiny' and American Policy in Samoa, 1872-1899," pp.46-47.

23 Rigby, "Private Interests and the Origins of American Involvement in Samoa, 1872-1877," p.79.

24 Anderson, "'Pacific Destiny' and American Policy in Samoa, 1872-1899," p.47.

25 Torodash, "Steinberger of Samoa," p.89.

IV サモアにおけるスタインバーガーの活動

スタインバーガーは二期にわたってサモアで活動をしている。最初が1873年8月7日から1873年8月21日以降1か月足らずである。2回目が1875年4月1日から1876年3月²⁶までである。サモアにおいてスタインバーガーはどのような活動を行ったのであろうか。その活動を追っていくことにする。1873年8月7日、スタインバーガーを乗せた船はパゴパゴ港に停泊²⁷していた。この時、彼はサモア人に対し、自らを合衆国特使と名乗った²⁸。彼がサモアにおいて使ったこの肩書は、アメリカ議会に承認されたものではなく、彼が個人的に名乗ったものであった²⁹。このことをグラント大統領も知っていたが、黙認³⁰していた。

この頃、サモアでは首長間の武力闘争が絶えなかった。その中でも、1869年4月から1870年8月までと、1872年2月から1873年5月までの内乱は特に激しいものであった。スタインバーガーが到着した際、サモアの現地住民は戦いにうんざりしていた。彼が合衆国特使を名乗ったため、サモアの現地住民は彼の後ろ盾にはアメリカが存在すると考え、サモアの混沌とした状況を改善してくれるだろうと彼に期待した。スタインバーガーはこの状況を打開するために、「憲法」と法律の制定が必要だと考えた。この考えは、サモア人やサモアにいる外国人にも支持され、1873年8月21日、「サモア憲法」³¹が公布された。また、1873年10月3日には、新しい「政府」である、タイムア・アンド・ファイプレ³²が設置された。

この頃までにスタインバーガーは、サモアの様々な勢力と結びつきを持つようになっていた。彼が到着した頃には、サモアの現地住民は、中央ポリネシア土地商業会社とゴドフロイ社がこの地で土地を獲得する目的に気づきはじめており、自らの生活の地が奪われるのではないかと危惧し始めていた。サモアの現地住民はスタインバーガーを通じてアメリカの保護が受けられると考えた。その結果彼は、サモアの現地住民と絶大な信頼を築くことに成功³³したとされる。

実際のところ、スタインバーガーは中央ポリネシア土地商業会社と共謀していたし、ゴドフロイ社とも秘密裡に接触を繰り返していた。ところが、中央ポリネシア土地商業会社の創設者、スチュワートと彼は不仲であった。当時の中央ポリネシア土地商業会社には派閥が存在し、スタインバーガーはスチュワートと対立する派閥の友人に依頼をし、1873年中頃、スチュワートを中央ポリネシア土地商業会社から追い出すことに成功した。このように、スタインバーガーは、サモアにおいて、様々な勢力を自らの都合のいいように操作することが出来るようになりつつあった。

26 実際には、1876年2月初めからスタインバーガーはイギリス海軍の船に幽閉されていた。ここでは、サモアを離れたのが3月だったため、3月までの活動としている。

27 Stathis, "Albert B. Steinberger," p.90.

28 山本真鳥『オセアニア史』山川出版社、2000年、296頁、増田義郎『太平洋——開かれた海の歴史』集英社、2004年、166頁。

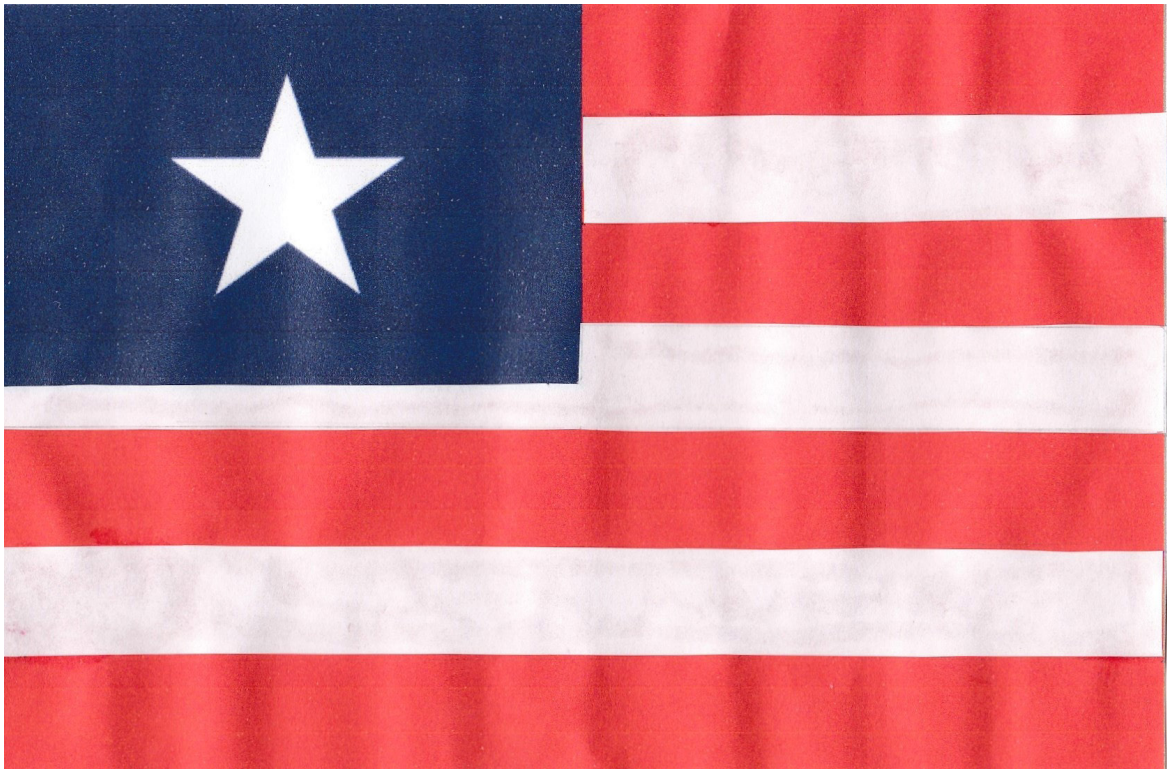
29 この頃の太平洋諸島では、アメリカから特使や代表、軍人が合衆国議会の承認を得ていないにもかかわらず、議会の承認を得たかのように条約を結んだり、活動を行ったりすることがあった。

30 Stathis, "Albert B. Steinberger," pp.103-104.

31 Stathis, "Albert B. Steinberger," p.90.

32 Stathis, "Albert B. Steinberger," p.91.

33 Rigby, "The Origins of American Expansion in Hawaii and Samoa, 1865-1900," p.229.



〈図1：スタインバーガー活動期のサモア「国旗」〉
Torodash, “Steinberger of Samoa,” p.55 より筆者作成

スタインバーガーは1875年7月4日「1870年代サモア政府」の首相に就任した³⁴。首相の仕事は、「王のために業務を行」い、「すべての仕事は王国の特別の利益に結びつく」ことが求められる。「首相によるすべての文書と業務は、王の権力と同等の力を有」し、「首相は、王国の重要業務において王の特別相談役である」とされた。また、「王は首相が把握していない行動するべきではない」とされ、「首相は両方（タイムアとファイプレ）の議会の議場に行き、討論に参加する資格を有し」ていた³⁵。スタインバーガーは、首相に任命されたことで、サモアの司法権、立法権、行政権の最高位を得ることとなった。

また、この時期にスタインバーガーは、サモアの「国旗」を制定している。それは、アメリカ国旗と類似したデザインであった（図1）。

V スタインバーガーの追放

サモアで地位を獲得したスタインバーガーであったが、サモアの欧米人勢力に煙たがられ、1876年H.M.S バラクータによって国外追放になる³⁶。まずは、この追放の経緯を見てみよう。

この追放に参加した人物の1人に、スティーブズ（Stevens）がいる。彼は、バラクータの司令官であり、船長であった。スティーブズからオーストラリア基地に送られた書簡には、スタインバー

34 Torodash, “Steinberger of Samoa,” p.56.

35 Constitution of Samoa (1875) 第1条第7節 in F. O. C. P. 2849, 括弧は筆者による。

36 Torodash, “Steinberger of Samoa,” pp.55-58.

ガーの追放について、以下の5つの理由が示されている。³⁷それは、スタインバーガーが独裁者であること、スタインバーガーの地位が詐称であること、³⁸1872年に結ばれたアメリカとの条約が承認されていないこと、³⁹王とタイムア（議会の一部）はスタインバーガーが首相であることに反対していること、スタインバーガーのサモア滞在に私利目的の点が認められることである。⁴⁰しかし、これらの理由は後付けであり、スティーブズが動き始めたきっかけは、彼のもとに嘆願が寄せられたことであつた。

1875年11月から12月にかけて、様々な人物がスティーブズに嘆願を行った。嘆願を行ったのは、イギリス領事、アメリカ領事、ロンドン伝道協会のメンバー、アナとオラトラの首長、外国人居住者、ドイツ領事である。スティーブズは、「(様々な人々が) 日々、私に…… (中略) …… (政府に対する) 抗議をしてくる。それは、すべての外国人の扱いが威圧的で非合法であり、冷淡なものであるということに関する要求と不満である。皆、すべての責任は首相であるスタインバーガーに繋がっていると言う」と記している。⁴¹ここから、当時のサモアの欧米人は、非合法で非人道的な扱いを受けていると感じており、その原因がスタインバーガーにあると考えていたことを伺うことができる。

この結果、1876年2月7日、スタインバーガーの首相解任と国外追放が決まった。スタインバーガーは、これ以後、バラクータに収容された。バラクータがサモアを出航したのは、1876年3月30日のことである。収容から出航までの約2か月間、バラクータは、スタインバーガーを収容したままサモアにとどまっていたのである。⁴²

サモアの欧米人勢力には煙たがられたスタインバーガーであつたが、サモアの現地住民からは、一定の支持をされていた。このことは、スタインバーガー追放後のサモアの現地住民の行動から伺える。S. F. ウィリアムズは、スタインバーガー追放後のサモアの現地住民について以下のように記している。「スタインバーガーの行動がアメリカ政府の支持を得たものではないという証拠を示したにもかかわらず、まだ、サモア人の何人かは、彼の行動がアメリカ政府の後ろ盾を得たものだ」と堅く信じていた。⁴³ギルソンやスチュワートも、1870年代において、スタインバーガーはサモアの現地住民の支持を得て

37 Captain C. E. Stevens, R. N., to the Commodore Commanding the Australian Station 1-5-1876 in F. O. C. P. 2849.

38 スタインバーガーは自らの地位について、トンガの領事、サモアのアメリカ領事、ドイツ帝国から承認を得ていたとしていた。しかし、実際は「通行書」程度のものしかスタインバーガーは得ていなかった。

39 1872年2月、アメリカ海軍司令官ミード (Meade) が結んだ条約のことである。

40 スタインバーガーの二期にわたる活動のうち、1回目の滞在が中央ポリネシア土地商業会社に関する目的であると判断された。スタインバーガーは中央ポリネシア土地商業会社の株主であつたという見解もあるが真偽は不明である。

41 Captain C. E. Stevens, R. N., to the Commodore Commanding the Australian Station 1-5-1876. 括弧は筆者による。

42 Torodash, "Steinberger of Samoa," pp.57-58.

43 From S. F. Williams in F. O. C. P. 2849 サモア人がアメリカ政府に何を期待していたかは、1877年の出来事から分かる。1877年、サモアの首長レ・マメア (Le Mamea) がサモア特使としてワシントンに派遣された。派遣の目的は、アメリカに「サモアの平和と良い政府の実現」の手助けを求めることであつた。

いたとする。⁴⁴ ウィリアムズの記録は、スタインバーガーの追放後もサモアの現地住民の中には、スタインバーガーの行動はアメリカ政府の後ろ盾を得たものだと信じ続け、支持をした者がいたことを示している。

1876年3月13日、バラクータの船員とサモアの現地住民の間で戦いが勃発した。⁴⁵ サモアの現地住民がスタインバーガーの釈放を求めたのである。戦いは壮絶なものとなり、サモア側は8名が戦死し、⁴⁶ イギリス側も数名の戦死者と3人の負傷者が出る結果となった。⁴⁷ サモアの現地住民は、スタインバーガーをサモアに留めておくことを求めた。一方、欧米人はスタインバーガーをサモアから追放することを求めた。バラクータの船員との戦いは、こうしたお互いの主張がぶつかった結果起こった出来事であった。

1876年4月の初め、スタインバーガーはフィジーのレウガで釈放される。⁴⁸ 彼は、1876年6月に書簡をサモアのタイムア・アンド・ファイプレと有力首長たちに送った。それには、自分はこれからもドイツやアメリカ、イギリスとサモアの間を良好なものにするために働き続けるという内容が書かれていた。⁴⁹ こうした、追放後もサモアの現地住民のために働き続けるという姿勢を示したことも、スタインバーガーがサモアの現地住民の支持を得た理由の1つであろう。追放後、スタインバーガーがサモアに戻ることはなかった。しかし、サモアの現地住民は彼のサモアへの帰国を望んでいた。1876年7月、サモアの「政府」⁵⁰ は、スタインバーガーに「……サモア人はスタインバーガーがサモアに戻って来ることを望んでいる。」という書簡を作成している。この書簡の宛名には、彼の肩書として、サモア政府最高のタイムア (Taimua Sili o le Malo o Samoa) と書かれており、⁵¹ この肩書はスタインバーガーがサモアの政治において重要な地位の1人として評価されていたことが伺えるものである。

VI おわりに

追放後のスタインバーガーに関する情報は、彼が54歳で亡くなるまでほとんど分かっていない。

44 Gilson, R. P. (1970) *Samoa, 1830-1900: The Politics of a Multi-cultural Community*, Melbourne, London: Oxford University Press, pp.294 -296, Stuart, P. C. (2007) *Planting The American Flag: Twelve Men Who Expanded the United States Overseas*, Jefferson, North Carolina, and London: McFarland& Company, p.42.

45 Stathis, "Albert B. Steinberger," p. 99.

46 Taimua and Faiple of Samoa to Queen Victoria, Dated Fale Taimua, MN, 22-7-76 written by MK Le Mamea, Tusitusi—copy in Samoan in T. F. P..

47 Taimua and Faipule of Samoan Govt. to prince Bismarck of Germany, dated Fale Taimua, MN, 22-7-76 written by MK Le Mamea, Tusitusi—copy in Samoan in T. F. P..

48 Torodash, "Steinberger of Samoa," p.58.

49 Steinberger to Taimua and Faipule of Malo, dated Auckland, 9-6-76-copy in Samoan in T. F. P..

50 この時、サモアの「政府」は、タイムア・アンド・ファイプレと呼ばれるものとプレトゥアと呼ばれるものの2つに分裂していた。スタインバーガーに書簡を送ったのは、タイムア・アンド・ファイプレの方である。

51 Taimua and Faipule to A. B. Steinberger Taimua Sili o le Malo o Samoa, dated Fale Taimua, MN, 24-7-76 written by MK Le Mamea, Tusitusi le Malo -copy in Samoan in T. F. P..

ただ、彼の活動を歴史上に位置づける上で、2つの課題があげられる。

1点目は、スタインバーガーの活動とアメリカの国家としての太平洋進出との関係を明らかにすることである。彼のサモアにおける活動はアメリカ議会に承認されたものではなかったし、彼の肩書きも彼が個人的に語ったものであった。その一方で、彼の派遣にはグラント大統領がかかわっている。スタインバーガーがサモアの現地住民に活動を通じてなんらかのアメリカの印象を植え付けたのは間違いないし、彼はサモアで立法権、行政権、司法権を握るほど影響力のある人物となっていた。スタインバーガーが議会の承認を得ずに行った活動をアメリカの太平洋進出という国家の策略と結びつけることは短絡的にすべきではないが、全くの無関係ともいえないであろう。

2点目は、スタインバーガーが活動した地域と後にアメリカ領となった地域の地理的矛盾を埋めることである。スタインバーガーが主に活動を行った地域はウポル島であったが、後にアメリカ領となったのは、ツツイラ島とマヌア島であった。当然、スタインバーガーの活動がツツイラ島とマヌア島に全く影響がなかったわけではない。それぞれの島と島の間関係を把握した上で、サモアにおけるスタインバーガーの活動をアメリカによる太平洋進出の歴史の文脈に位置づける必要があるだろう。

アメリカの海外膨張の動きは1898年の米西戦争を転機として実現した、というのがアメリカ外交史において多くの支持を受けている見解である。19世紀におけるアメリカの太平洋における様々な活動をこうした海外膨張の動きの一部であるととらえる見解も存在する。近年の日本の研究においても、こうした太平洋におけるアメリカの動きを海外膨張という視点から考察する試みがなされている。サモアにおけるスタインバーガーの活動もこうした文脈の一例となりうるが、この点の実証については今後の課題としたい。

参照文献

〈一次史料〉

New York Times: May 4, 1894

British Foreign Office Confidential Prints (F. O. C. P. 2849) (FO881/2849) (PMB1003, Pacific Manuscripts Bureau, Australian National University).

Taimua-Faipule Papers [T. F. P.] (PMB1003, Pacific Manuscripts Bureau, Australian National University).

〈二次文献〉

Anderson, S. (1978) “‘Pacific Destiny’ and American Policy in Samoa, 1872-1899,” *Hawaiian Journal of History*, volume12, pp.45-60.

Davidson, J. W. (1966) “Problems of Pacific History,” *The Journal of Pacific History*, Vol.1(1), pp.5-21.

Davidson, J. W. (1967), *Samoa mo Samoa: The Emergence of the Independent State of Western Samoa*, Melbourne: Oxford University Press.

Davidson, J. W. & Scarr, D. (1973) *Pacific Islands Portraits*, Canberra: Australian National University Press.

Gilson, R. P.(1970) *Samoa, 1830-1900: The Politics of a Multi-Cultural Community*, Melbourne, London: Oxford University Press.

Kennedy, P. M. (1973) *The Samoan Tangle: A Study in Anglo-German-American Relations 1878-1900*, Queensland: University of Queensland Press.

- Meleisea, M. (1987) *Lagaga: Short History of Western Samoa*, Suva: University of the South Pacific.
- Meleisea, M. (1987) *The Making of Modern Samoa: Traditional Authority and Colonial Administration in the History of Western Samoa*, Suva: Institute of Pacific Studies of the University of South Pacific.
- Rigby, B. (1973) "Private Interests and the Origins of American Involvement in Samoa, 1872-1877," *The Journal of Pacific History*, vol8 (1), pp.75-87.
- Rigby, B. (1988) "The Origins of American Expansion in Hawaii and Samoa, 1865-1900," *International History Review*, 10(2), pp.221-237.
- So'o, A., *Democracy & Custom in Samoa: an Uneasy Alliance*, Suva: IPS Publications, The University of South Pacific, 2008.
- Stathis, S. W. (1982) "Albert B. Steinberger: President Grant's Man in Samoa," *Hawaiian Journal of History*, volume16, pp.86-111.
- Stuart, P. C. (2007) *Planting the American Flag*, Jefferson, North Carolina, London; McFarland & Company.
- Torodash, M. (1977), "Steinberger of Samoa: Some Biographical Notes," *The Pacific Northwest Quarterly*, vol.68, No.2, pp.49-59.
- 北上大祐「現代アメリカ太平洋政策史に関する研究状況」『西洋史学論集』第50号、2013年、97-112頁。
- 中村綾乃「ドイツ領サモアにおける「人種」と社会層——混合婚をめぐる議論を起点として」田嶋信雄／工藤章[編]『ドイツと東アジア 1890-1945』東京大学出版会、2017年、253-299頁。
- 山本真鳥「ファレアタの地縁組織——サモア社会における称号システムの事例研究」『国立民族学博物館研究報告』9巻1号、1984年、151-189頁。
- 山本真鳥『オセアニア史』山川出版社、2000年。
- 山本真鳥「上からの統合、下からの統合——サモア社会の国民統合と村落構造」山本真鳥／須藤健一／吉田集而[編]『オセアニアの国家統合と地域主義』JCAS連携研究成果報告6、2003年、317-354頁。
- 山本真鳥「ジェンダーの境界域——ポリネシア社会の男の女性」山本真鳥[編]『性と文化』法政大学出版局、2004年、187-219頁。
- 山本真鳥「オセアニア世界の植民地化と土地制度」小谷汪之／山本真鳥／藤田進『土地と人間——現代土地問題への歴史的接近』有志舎、2012年、115-214頁。